学科を超えた福祉の学習

報告者：北海道社会福祉協議会　福祉教育専門委員会　委員　宍戸敏雄

協力校視察先：北海道当別高等学校

○学校環境

当別高校は、普通科３間口、家政科１間口、園芸デザイン科１間口の５間口の高校である。当別高校の経営方針の中には、次のことを推進することを謳っている。三つの学科の「横断的な取組による特色ある教育活動の推進」、「奉仕や福祉、国際理解等の特別活動を通じて社会性や人間力を高める教育を推進」、「開かれた魅力ある学校づくりを推進」である。このことを具現化した取り組みが当別高校の福祉の学習・ボランティア活動の取り組みとなっている。

○活動の特色、着目した点

学科を超えての横断的な取り組みとしては、「総合的な学習の時間」等の中で行っている。また、学科ごとの特徴を生かす取り組みも行っている。

【横断的な取組】

①模擬講義（１学年12月11日、２学年９月11日、３学年９月４日）

「福祉を理解しようとする気持ちや社会に貢献しようとする心を育成する」目的で、各学年に適したテーマで講演が行われる。

講師は、北海道医療大学、特定非営利活動法人ゆうゆう就労支援推進事業部の方が行っている。

②除雪ボランティア（１学年２月19日、２学年２月５日）【後述参照】

【学科の取組】

①ことぶき大学（60歳以上の方を対象とした生涯学習）の高齢者等との世代間交流（家政科３学年10月７日）

この事業は「生徒と高齢者が協力して、当別産の食材を使ったピザを作り石釜で焼き上げ、試食をすることにより世代間交流を図る」ことを目的に行われている。

②保育園･幼稚園児との田植え稲刈り体験指導（園芸デザイン科３学年５月29日、10月７日）

「園児に田植え、稲刈りを教えることで指導性を高め、学習した内容を更に深める」ことを目的に、田植えは園児約140名、稲刈りは園児約100名に生徒が説明を行い、一緒に作業を行っている。

③福祉施設の訪問、町内保育ボランティア（家庭クラブ）

○視察の内容

・視察時の活動内容：高齢者が居住する住宅等への除雪ボランティア
・視察日　平成28年２月５日（金）
・視察場所：当別町内町営団地

○活動の様子

当別町は、私の勤務地である岩見沢と変わらぬ量の雪があり、除雪作業の大変さがうかがえる。

除雪作業を行う町営団地は平屋建ての四戸がつながった長屋で、当別高校とは道を挟んだ位置にあるため、移動の必要がなかった。この除雪ボランティは、「総合的な学習の時間」２時間分、学校の時間割上では５･６時間目に行われた。準備と片づけ、移動、説明を除くと作業は約１時間程度のものである。参加する生徒は10班編成で作業場所が割り当てられ、除雪した雪が東側と西側の２か所に捨てられる。

社協の準備として排雪場所は前もって大量の雪が置けるようにスペースが空けられている。これ以外にも、事前に団地住民と連絡を取り、自力では除雪が困難な高齢者等の世帯を確認し、打合せ･実施計画を立てて行く。その際、多くの人が動き、大量に出る雪をスムーズに排雪場所に運ぶためには班ごとの動線図も必要となる。当日に関して

も、高校の教員が各班につき作業しているとはいえ、全体の流れを見て的確に指示をするために社協職員、民生委員が各所に配置されている。

開始時間になると、各班、実に楽しそうに一生懸命作業を行っていた。実施中、生徒会執行部に話を聞くことができた。その生徒によると、この除雪ボランティアは２年前までは、生徒会執行部の呼びかけで、放課後に有志で行っていたとのことであった。ある程度除雪を終わらすためには暗くなってからも作業は続いたそうである。当時と今を比べると、人数が多くなったこともあるが、暗くて作業しづらいこともなくなり、短時間で効率的に行え良くなったという話であった。

除雪作業中、団地の方が数名顔を出し、生徒にねぎらいと感謝の声をかけていた。学校のすぐ横にある団地ではあるが、通学路ではないので普段は会う機会はないと住民の方が話していた。

住民の方から直接感謝の声をかけられ、学年全員で行うことで、約１時間という中で目に見える形で成果を上げることができ、そのことで、共にひとつのことを成し遂げたという気持ちが、終了時に生徒の顔に現われていた。

○視察を終えて

当別高校の「福祉の教育」「ボランティア活動」と考えられる取り組みの数は決して多いものではないが、いくつかの取り組みから、大切なことがあると考えられる。

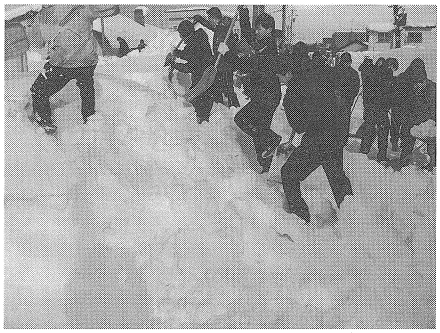
ひとつは、「地理的条件」を生かしているということである。

学校に隣接する団地の除雪ボランティア、地域にある北海道医療大学等の講師による講演等がそうである。「地理的条件」を生かすということでは他校でも行っているように思われるが、それではどの学校でも上記のような除雪ボランティはできるだろうか。この取り組みには「福祉」「ボランティア」ということに関して生徒たちに考え、行動し、つながることを伝え、体験をもとに成長していってもらいたいという思いが感じられる。当日の除雪ボランティアを行う前の準備はかなり大変であることは想像に難くない。団地の除雪だけを考えればこのような取り組みをすることの方が、労力がかかるのではないだろうか。私たちは、福祉の教育を行う場合、学校を起点に考え、どの場所にどのような施設があり、どのような場所があり、どのような人がおり、などなどにアンテナを張り、単に何ができるかと考えるのではなく、ひと手間、二手間、かけることで、一見できないようなこともできるようになることをこの除雪ボランティアから学ぶことができる。

二つ目として、生徒の「成長に合った課題」を提示しているところである。

模擬講義は、「福祉を理解しようとする気持ちや社会に貢献しようとする心を育成する」目的で、学年別に行われている。その学年別の講演テーマを見ると生徒の成長に合わせ、なおかつ、学年に見合った課題を提示していることが分かる。１年では「私とあなた、どちらが大切」、２年では「支え合う社会を作る」、３年では「社会人への道」である。「成長に合った課題」の提示は、学科の取り組みにも現れている。１・２年生のときに学習・実習等で身に付けたことを生かし３年生で行っている園芸デザイン科の「保育園・幼稚園児との田植え稲刈り体験指導」や家政科の「ことぶき大学の高齢者等とピザ作りを通じての世代間交流」ができるのである。

三つ目として、「実践～意欲を持って実践する」ができているところである。

除雪ボランティアの様子から、感じたことは、当別高校の教育目標のひとつ「実践～意欲を持って実践する」である。当たり前のことであるが、これが全体としてできる学校は素晴らしい。やはり、園芸デザイン科、家政科の学習内容がここに生きているのではないだろうか。授業の中の実習等で他者と協力し作業等を行う、または、学校外の方々と関わりを持ちながら学習を進めるなどの開かれた体験が行われている。そのことが積極的に取り組む姿勢となって、除雪ボランティアのような横断的な取り組みの中では普通科も含め「意欲を持って実践する」姿勢に結びついていると考えられる。

当別高校の取り組みは、それぞれが別の組織で行っており、それぞれの関係団体も違っている。教育目標、経営方針等、大きなところで同じ方向を向いていると言える。また、生徒に関しては、除雪ボランティアの生徒会執行部のように重要なところで生徒が取り組み関わっていくような仕掛けがあり、「福祉の学習・ボランティア活動」にとって重要なことなのではないだろうか。